

たのではあるまいか。

本作品は冒頭に記したように川辺町で発見されたものである。しかし、川辺町と知覧町は隣接し、しかも座頭と御前の出身地として並称されているので、川辺町に知覧御前に関する資料があってもおかしいことはあるまい。ところで、戦前、鹿児島県内を回っていたと聞く知覧御前の活動を残念ながら筆者は把握しかねている。出身地を聞くと、口を合わせたように知覧町の出身であると言ったという。どうしてこのようなことが起こったのであろうか。

川辺町にあった山田大徳院の由緒などによれば、常楽院の初代満市と共に比叡山に上った大栗が阿多郡川辺郷を知行して、正法山長嶋寺を建立して、大徳院開山真法阿闍梨を名乗ったという。そして、それは、伊作常楽院の宝山検校の下向よりも遙か昔のこととされているのである。つまり、川辺町には薩摩国で盲僧に関わる土地としては最も古い地域であるという伝承があったのである。そこに隣接する知覧町、しかも古く川辺町と同じ豪族の支配地であったこの地に御前の集まる寺院なりがあったとしてもおかしくないであろう。

しかし、それにしても戦前まで、それ程知覧御前が出ていたとすれば、知覧の地にそれらの御前の権利を守るなり、支配するなりした組織があったのではないかと思われる。が、先述のように、筆者は未だその結集の核であった何か、寺社か、行政組織（郷士、庄屋など）か、民間か、そうしたことを知ることが出来ないでいる。

最後に、本作品の成立を何時と見做せば宜いのであろうか。内容からこれが時代の下ったものであることは争われない。江戸時代後期から戦前までの何時かであることは確かである。一方、本作品が浄土教の布教に使われて来たという面から考えると、或いは一向宗禁制、隠れ念仏と関わることもありはしないかと考えられるが、如何であらうか。

知覧御前が自由に語れる話材の一つだったかと思っているので、筆者は一応、明治初・中期の作品かと考えている。しかし、雑俳集と一緒に置かれていたことからすれば、江戸時代に遡り得る余地もなくはないのである。しかも、江戸期に遡り得た時には、本作品の相貌も一変することになるかも知れない。

一見杜撰な作品であるが、本作品にはこのような魅力が秘められているのである。

(注一) 『研究年報』(平成四年三月)

(注二) 「中将姫伝説と当麻曼荼羅」(一冊の講座『絵解き』昭和六〇年九月)に拠る。猶、当麻曼荼羅の説話の初見は、建久二年に書かれた『建久御巡礼記』^(一九二)とのことである。

(注三) 猶、五来重氏は「西山上人証空などによって、鎌倉時代以降もっぱら浄土教の観経曼陀羅として信仰化した当麻曼荼羅も、平安時代までは山岳信仰的浄土信仰の対象だった」のではないかと、と考えて居られる(「当麻寺縁起と中将姫説話」『文学』昭和五二年二月)。

(注四) 「当麻寺」(『国文学』昭和五七年三月)。

(注五) 前出「中将姫伝説と当麻曼荼羅」から。

になった。しかし、本作品では、姫が捨てられる所にも、出家する所にも、そのようなことは全く触れられていない。

こうした説明不足、杜撰さは何を物語るのであるうか。

先述の点から筆者が考えたことは、本作品は丁寧読んで鑑賞されることを期待して書かれたものではあるまい、ということである。先述のように、作者は、中将姫が「ときのみかどにみそな^はなり」という筋を聞いていた、と見られる。にも拘らず、作者は、その筋をどこにも入れずに一篇を作り上げて済ましている。このようなことが許される作品の出来方は、記憶に頼って語り、その語りを写し取るという作業の外あるまい。従って、筆者は、この作品を、語りの聞き書きとして成ったものだろうと考える。表紙の裏に、物語の実質的冒頭部が書きはじめ然として記されていることも、「とよなりこ」「とふなりこ」と人名の表記が一致しないことも、聞き取りという成立事情を語るものではあるまいか。

語り手は、中将姫が継母に苛められながら、それに反抗することもなく、只管に浄土経を信じて生き、曼荼羅を作って極楽往生を遂げた人だ、ということ語ることに全ての力を注いだのに違いない。語り手が中将姫を「継母にいじめぬかれる哀切極まりない悲話のヒロイン^{（注五）}」と捉えていることは間違いない。姫の一生が語り始められるところに、「あらいたわしや」という感動詞が入ってしまったのは、語り手の感情が語る前に露出してしまったということであろう。

語り手は、一度も邪慥な態度を見せることもなく、只管に信仰に生き

た中将姫を語って、「にょにんもほとけに。なる」ことの例とすれば、それで充分だったのであろう。その主題に沿って纏められた、ある一回の話がこの作品だったのではあるまいか。

この作品は女人往生を説く唱道文学である。このような作品を語ったのは、どのような人であろうか。

中将姫の物語が絵解き説教の草分けであったことは先に記した。しかし、本物語を曼荼羅や絵巻を見せながら、寺院で住職の語ったものと見做せるであろうか。筆者には否である。先述のように、本物語には杜撰なところが多過ぎる。絵の制約も受ける訳だし、教養人でもあった住職が、このような杜撰な話をするとは、筆者には考え難い。そこで、筆者は本物語を遊芸の徒の語り物と見做したいと思うのである。

この中将姫の物語は、「にょにんもほとけに。なる」という物語であった。従って、この作品の享受者は主に女性であり、語り手も女性を考えた方が宜さそうである。ところで、本物語の特色の一つは、鎌倉中期から江戸初期までの中将姫の物語に比べて、話が相当に短くなっていることである。その理由の一つは（省略しても宜いということだから）聴衆にかなり知られている話材と見做されていたことであろう。そして、もう一つはこの中将姫の語りが本格的なものではなかったことであろう。せいぜい余興の一つに過ぎまい。そのようなものを語る女性の語りの徒として、筆者の念頭に浮かんで来るのは知覧御前である。本物語は、知覧御前の語りの聞き書き（勿論、教材としても使える）として作成され

ことはどう考えたら宜いのだろうか。

中将姫自身を「もとはほけの御へんげ」とするのは確かに前に記した江戸時代初期までにあった中将姫の物語とは大きく異なっている。しかし、山上氏蔵の「(中将姫)」等と全然無関係とも言い難いように思われる。というのは、「(中将姫)」では(筋)の上で余り重視されているとも見えないが) 中将姫が春日大明神の「申子」とされているからである。本作品は、中将姫が春日大明神の「申子」であり、最後に「ほとけになる」ことを根拠として「もとはほけの御へんげ」と直線的に解釈したものと見る事が出来ないだろうか。

継母が中将姫を殺そうとして、「どくをくすりと。のましたりどくのしよくもつ。どくのさけのませ」たりするのは、当麻寺で戦後暫くまで続いていた「絵解き」とも関係がありそうである。村山道宣氏によれば、その「絵解き」では「姫が六つの桃の節句を迎えた時、毒の酒を盛り命を断とうとした」とのことである。^(注四)しかし、その時は、「雲の知らせで姫は難を逃れるが、横に座っていた継母照夜の子豊寿丸は誤ってその毒酒を飲み死んでしまった」とのことで、「なんの。わざもなし」^レ「どくもくすりに。なりにけり」という経緯とは全く異なる。ここも、本作品が、中将姫の「もとはほけの御へんげ」ということを重視して、独得の新展開を考え出したものなのかも知れない。

中将姫自身が曼荼羅を織るという発想は、例えば、元禄十三(一七〇〇)年山村座興行の『うす雪今中将姫』の結び、「薄雪尼今中将姫と

なつて蓮の絲にてつぐのひ給へ」にも認める事が出来る。しかし、このことも、「化尼」や「化女」が阿弥陀如来と観世音菩薩だったすれば、最後には姿を消してしまう訳で、もともと形而下の世界では中将姫が織つたのだと言う事が出来る。本作品は余りにも短くなっているので「化尼」や「化女」が省略されたのかも知れないが、中将姫自身が「もとはほけの御へんげ」であるという線上で、自ら織り出したという解釈がなされたのかも識れない。このように本作品は独自の解釈で貫かれているかと思われる節が多いのである。

それにしても、本作品では、説明不足、杜撰さが目に余る。

中将姫が九歳の秋、「きしうなりだのこうりなるひばる山」に継母の「むほん」の為に捨てられ、十六歳の春に「ひばる山」から奈良の都に帰り、「しゆけのねかい」から自邸を出て当麻寺に参籠するという経緯は、粗筋に過ぎず、どうしてそうなっていくのか、この作品だけでは全く分からない。姫の動きは、御伽草子にほぼ一致しているが、「とりもかよわぬ。しんざんにをひとりござる」というのは、武士夫婦と世を忍んで過ごしていたのとも違うようである。又、冒頭部にある「ときのみかどにみそなり^(注五)」というのは、本作品における姫の一生から完全に浮いている。御伽草子によれば、姫は二回入内の命を受けている。一回は十三歳の時で、この時はこのことが契機になって、継母の奸計に陥り、危く雲雀山で命をおとしかけている。もう一回は、父右大臣に見付け出されて帰郎した翌年のことで、姫はこれを契機にして出家を遂げること

ころ、庵が目に入った。馬を寄せてみると、ここ数年人の住んでいない気配である。編戸を押し開いて、庵の中を見てみると、五十歳位の女と十四五の高貴な姫がいた。姫は文机に向かつて経を書いていた。怪しんだ右大臣は、馬から降りると矢を番えて、正体を明かすように迫った。姫は、娘の中将姫であると名乗って、継母の讒言によってこの山に連れて来られてからの経緯を話した。父右大臣は、これを聞くと、弓矢を投げ捨てて、姫を抱きしめた。右大臣は、姫を殺すように命じた後、そのことを悔い、同じ年頃の娘を見る度に悲しんでいたのだった。そして、一つ蓮にと祈っていた甲斐あって、生きて再会出来たのに違いないと言って喜んだ。やがて、右大臣は輿を召し寄せて、姫を伴って帰宅した。その後は復大切に育てていたが、翌年の夏、再び后に立つようという宣旨があった。父右大臣は喜んでその準備をし、周囲も色めきたった。しかし、中将姫は、そのことを聞いて、俗塵に沈むことを悲しく思った。縦え後の位に上ったとしても、死ねば地獄に堕ちるとしか考えられなかったのである。そこで、姫はその夜の内に家を出ようと思った。今度家を出たら、再び父には会えないだろうと思ったので、華やかに装って、最後の面会をした。何も知らない父右大臣は、嬉しそうに姫を迎えたが、姫が涙を流すのを見て、何の恨みがあるのかと怪み、かえって姫を慰めた。中将姫は、入内したら一緒に栄えたいと思っているが、父の年齢を考えるとそれも叶わず、私一人が栄えることになるのが悲しいのです、と言って泣いた。父右大臣も涙を流したが、そう一方的に嘆くものでは

ないと論して、姫が部屋から出て行くのを見送っていた。父右大臣の許を辞した中将姫は、その夜、家を出た。名残りは尽きなかったが、心強く振り捨てて、とうとう当麻寺に辿り着き、出家を遂げたのであった。

以下は『當麻曼荼羅縁起』のものと大差ないので省略することにする。

筆者は右に、鎌倉時代初期から江戸時代初期までの中将姫の物語の展開を辿って来た。

川辺中央公民館の所蔵する本作品が、この中将姫の物語の延長線にある作品であることは、主人公が「よこはきうたいじん。とよなりこそむめご」とされる「中上ひめ」であることから間違いない。ここには又、「はすのいとを。とりあつめ」て染め、その「五しきのそのいと」で「まんだら」を織り上げたことも出ている。

しかし、『當麻曼荼羅縁起』等では、曼荼羅は、姫が「生身の如来」を見ることが出来なければ、この寺から出ないと誓ったので、当の阿弥陀如来が訪れて、「極楽の莊嚴」を示す為に、この曼荼羅を織り上げたことになっている。ところが、この作品には「化尼」も「化女」も出て来ない。しかも、前半には、中将姫について「もとははけの御へんげ」という表現があり、外ならぬ当の中将姫が阿弥陀如来の「へんげ」であつたという考え方の下に、この作品は纏められていると見られる。中将姫自身が阿弥陀如来の「へんげ」であれば、「化尼」も「化女」も必要がなくなるし、曼荼羅を織る動機も全く異なったものになるう。この

みながら、自分の後世の為に念仏して欲しいと言い置いて、息を引き取った。姫が七歳になった春のこと、姫は子供には父母がいるということに気付いた。そこで、乳母にどうして自分には母がないのか、と尋ねた。乳母から母の亡くなったことを聞いた姫は、父右大臣に母が欲しいと訴えた。そこで、右大臣は姫の希望に応えて、後妻を迎えることにした。姫は、継母を実の母のように思って、親しんだ。ある時、姫は貴い僧を招いて称讃浄土経を受けた。父右大臣はそれを見て一層姫をいとしく思ったが、継母はそれを安からず思って、何かと右大臣に姫を讒訴するようになった。しかし、右大臣がいつも訴えを取り上げないので、とうとう継母は姫を殺そうと思うに至った。姫が十三歳になると、姫の美麗なことが天下の評判になった。そして、姫を入内させるようにという宣旨も下されたので、父右大臣は大変喜んで、入内の準備を始めた。継母は、益ます安からず思って、右大臣に姫のところへ男が出入りしていると言って、訴えた。継母は、人を語らって、中将姫の部屋に男を入りさせていたのであった。それでも右大臣が取り上げないので、継母は、その次の日の朝姫の部屋を見て欲しいと、右大臣に迫った。止むをえず、右大臣が翌朝姫の辺りを窺っていると、果たして二十歳ぐらいの男が出て来た。継母は、それ見たことかと右大臣を責め、姫の許に通う男も一人ではないと言って、姫の素行の悪さを強く訴えた。右大臣は、涙を流して、先妻と約束したので、「いかにもして世にあらせはや」と努力して来たのと言って、悔しがった。しかし、明日になればこの噂

が世間に伝わり、自分の家の恥となるだろうと言って、武士を呼び、姫を雲雀山に連れて行って、首を打つように命じた。武士は姫を連れて雲雀山に向かった。山の奥の谷川のある所で武士は命を伝え、首を切ろうとした。姫は、七歳の時から父母の為に毎日六巻の経を読んできたが、今日は未だ読んでいないので、読経の猶予が欲しい、と願った。武士は（姫に心打たれて）待つことにした。姫は読経を始めたが、涙が溢れて来て、とうとう三巻で経を巻き納めてしまった。姫は、今の一卷は父の現当の祈りに、一卷は母の菩提の為に廻向し、残る一卷とこれから唱える念仏で一つ蓮に迎えて欲しい、と祈念した。それから、武士に向かって、自分の死体をよく匿すように、と着ていた小袖を脱いで渡し、父に首を見せる時は血をきれいに洗い落として置くこと、命を惜しんだなどと言わないことを言い渡した。そうして、念仏を唱えて十念が終わったら首を打つように命じて、姫は阿弥陀如来に対して念仏を唱えて、死を待った。しかし、武士は、姫の様子に打たれて、刀を振るえず、俯しに伏して泣き出した。結局、武士は、姫を助けることにした。そして、柴の庵を結び、妻子を呼び寄せ、木の実を拾ったり、里で物を乞うたりして、姫を育てた。中将姫が十四歳の春、その武士も重病を受けて、呆気なく死んでしまった。庵の傍に葬った後、姫はその妻子に紙を求めて来るように言った。それは、その武士と母の為に、一千部の称讃浄土経を書写しようというのであった。さて、その頃、姫の父右大臣は雲雀山で七日間の狩を計画していた。狩り人を集めて、山を登り谷に下ったと

ろが、この娘は「ふかく佛のみちをたつねて法のさとりをもと」めるのであった。そして、「稱讃浄土經一千卷」を書写して、当麻寺に奉納した。彼女は、天平宝字七（七六三）年、ついに出家したが、その時、「生身の如来」を見なければ、この寺から出るまいと心に誓ったという。彼女の願いは、阿弥陀如来と観世音菩薩が手ずから作製した曼荼羅によって叶えられた。そして、その後、宝龜六（七七五）年、（中将）姫は思いの通りに住生の素懷を遂げたのであった。その臨終の奇瑞は「青天たかくはれて紫雲な、めにそひきたり 音楽にしよりきこゆ 迦陵頻伽のさゑつりをなし聖衆ひんかしにむかふ 攝取不捨のちかひあやまたす異香ひさしく薫す」と記されている。

右に出て来た曼荼羅は「九品の教主」阿弥陀如来の姿を示すものという。右では全く作製の経緯に触れなかったので、次にその部分を記す。

（中将）姫が阿弥陀如来の姿を見なければこの寺から出ないと誓って五日後、一人の比丘尼が訪ねて来た。比丘尼は、姫の志が嬉しくて、それで来たのだと言って、阿弥陀の姿を見せようと言う。そして、蓮の莖百駄を集めるよう頼んだ。姫はすぐ時の帝に願い出て、近江国の課役として、その百駄の莖を集めて貰った。比丘尼は、その莖を折って、糸を紡ぎ、沢山の枠に巻き取った。その後、井戸を掘って、その水に浸すと糸は不思議にも五色に染まった。井戸を掘った辺りには、天智天皇の時代の奇跡を伝える「そめ寺」があり、役行者が植えたという桜の生え代わったものもあった。比丘尼が現れて三日目の夕方、今度は「化女」が

訪ねて来た。そして、比丘尼に糸の準備が出来たかどうか聴いた。比丘尼が染め上げられた糸を渡すと、「化女」は、藁二把を油二升に浸して、堂の北西の隅に機を立てて織り出した。戌の時に織り始めて、寅の時には織り上がった。「化女」は、その一丈五尺の曼荼羅に竹の軸を付けて、中将姫と比丘尼の前に掛けると、五色の雲に乗って忽然として姿を消した。

以上のように纏められた物語は、そこに出て来る曼荼羅（と同じものを聴衆の前に掲げて講説する絵解き説教で使われたらしい。絵解き説教を始めたのは法然の門下、西山派の祖の善慧房証空と言われているが、その証空が使ったのが外ならぬこの当麻曼荼羅だったのである。従って、中将姫の物語は浄土教信仰の普及と共に広く知られるようになったと考えられている。^{（注）}

さて、右のように曼荼羅説教に伴って行われたりした鎌倉（初）中期の中将姫の物語に変化が現われるのは、御伽草子の世界（室町時代から江戸時代初期にかけて）である。変化は、中将姫の生い立ちの上で起こっている。この時継子苛めの筋が大幅に取り入れられたのである。次に、山上嘉久氏蔵の「（中将姫）」で、その辺りを紹介しよう。

中将姫は、それまで子供のなかった横佩右大臣夫婦が春日大明神に祈願して儲けた娘であった。ところが、姫が三歳になった時、母北の方が重病に罹った。北の方は、右大臣に姫が二十歳になるまで他人に会わせないように約束させ、姫に対しては幼くして母無し子となることを哀れ

せんだちハだいしだいひの。

てのいとを中上ひめハ。あり

がたやはすのい□にて。

まんだラをごくらくて

いそを。あらハしてあらあり

がたや。なむあミだぶつや

あミだぶつ

〔考 察〕

関山和夫氏によれば、中将姫の物語は鎌倉時代初期に成立した『諸寺縁起集』の記事の一つを基にして成立したと言われる。^(注)

『諸寺縁起集』を見ると、横佩大納言の娘が本願であったとか、「化人」が一夜にして蓮の糸で織ったとか、中将姫の物語の中心をなす要素が二つに分かれながら既にそこに記されている。

この『諸寺縁起集』の記す二つの伝承を緬い交せて、神秘的な一篇の物語に仕立てたものが『當麻曼荼羅縁起』等であったかと思われる。その時、用明天皇の皇子麻呂子親王の夫人よりも横佩大納言の娘の方が物語的なので、主人公として選ばれることになったのではあるまいか。横佩大納言は『當麻曼荼羅縁起』で既に、「おと」とされているが、その娘が「中将」の名を得るのは、同じ時期の『私聚百因縁集』(住信編^{一・二五七}正嘉元年編集) 辺りからのものである。

さて、この物語として纏められ始めた鎌倉時代中期の作品では、主人公の姫の敬虔な一生と曼荼羅の作成とその内容の殆んどを占めている。次に、この物語を広く知らせることになった『當麻曼荼羅縁起(詞書)』で、中将姫と曼荼羅の作成とがどのように描かれているか、見てみよう。

(中将) 姫は、淳仁天皇の時代に横佩大臣という人がいた、その人の娘という。彼女は、文字通りの深窓の内に大切に育てられていた。とこ

こく西方ごくらく。

ㇿ

(ウ)

じようとなりぢぞう文じ
ゆハ。さきにたちふけん
ミろくや。せんしゆうハ
はたてんがいを。なびかして
くハんをんせいし。

ㇿ

(7・オ)

そのほかに五しきのは
たを。ふきちラシそラに
ハを□んがく。ありたまへ
しよう七りきや。くんぎに
てあミだによウラいハ。
やまごしにをがまれたもウ

ㇿ

(ウ)

。ありがたや五しきのくも
を。なひかしてふゑやたこて
中上ひめハ。いきながラごく
くじよふどい。ゑごらいこ
によにんもほとけに。
なるほどニかなラじやけん

ㇿ

(8・オ)

なな。きをもつなこゝろ才
まぬ。□ももたぬわれはほと
けに。なるぼとにしようこハ
たいまの。中上ひめまゝは、を
やに。むひとうにしられた
ことも。うらみなシ

ㇿ

(ウ)

あらためてしゆけのミぶ
んと。なりたまへそれより
大和國中のはすのいと
を。とりあつめミずハさミ
づに。そめハけてそめの

ㇿ
(ウ)

むらなる。そめいどのそ
めのむらこそ。これめい正
五しきのそのいと。か
□けをいていとかけざく
ラと。もうすなり

ㇿ
(5・オ)

これにてまんだラ。こウゑ

りてころハ六月。け旬^{ジュン}なり
二十二日の。よにいたりよ
の四つ時より。をりはジ
めそのよるの七つに。

ㇿ
(ウ)

をりしまい一丈五尺の。
まんだラをミときのあ
いだに。をりしま^イ まんだ
ラぶつ^{フツ}の。こいしんでそれ
よりしばラくていのち

ㇿ
(6・オ)

にかぎりの。あるやかく
ほうき六ねん。そのは
るに御とシ二十九才の。四
月の十四日なる。うま

御へんげでどくもくすりに。
なりにけりまゝはゝをやハ。
ぜひもなくそれよりむほ
んを。又たくミあらいたハ

┐

(2・オ)

しや。中上ひめ御とシ九才の。
あきのころきしうなりだの。
こうりなるひばる山にて。すて
られてとりもかよわぬ。しんざ
んにをひとりござるや。をいと
シやいかまゝはゝ。をやなれ

┐

(ウ)

どむごやどうよく。なさ
けなやそれもういめと。を
もわず二つねくししようさう

ん。しよどきよつとめてござ
るや。し正なる御とシ十六。

┐

(3・オ)

そのはるにひばるやまをバ
。たちのいてならのミやこゑ。
もどられてしゆけのねかいを
。あるゆへにならのミやこ
を。またいでゝたいまでら

┐

(ウ)

にて。こもりしが十七才の
。をんとしに中のほ□で
らに。たのミいりかミそ
りをろシて。あまとなり
ミにハしろむぐ。手にハじ
ずすみのころもと。

┐

(4・オ)

本文

ならのミヤこの。じだいなるこし
ようてんしの。ミかとにてよこはき
うたいじん。とよなりこそそのむめ
ご

「
(ウ)

「
(表紙)

きミようちらい。日本の中上めと。
もふせしわとふなりこの。御むすめとき

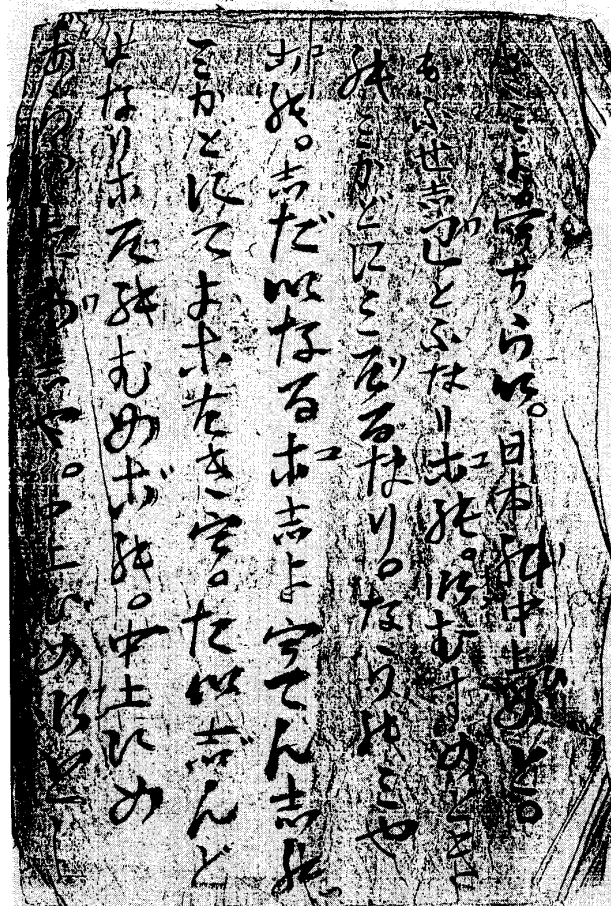
のミかどにミそるなり。ならのミヤ
この。しだいなるこしようてんしの。
ミかどにてよこはきう。たいじんと
よなりこそそのむめこの。中上ひめ
あらいたわしや。中上ひめ御とし。

「
(1・オ)

九才の。そのはるにまは、
をやに。をかゝりてういめつら
いめ。なさるべしまゝをは、
やハ。なさけなや中上ひめを。
ころそふとてどくをくすりと。
のましたりどくのしよく

「
(ウ)

もつ。どくのさけませどなん
の。わざもなくもとハほけの。



「
(1・オ)

〔翻 刻〕

凡 例

- 本文は、原文を忠実に翻刻することに努め、変体仮名を通行のものに改めた外は、筆字、活字の違いはあるものの、殆んど原文の通りである。
- ① 変体仮名に付けられた片仮名の読み仮名は行間に記した。
 - ② 僅かに見られる本文の補入も、右行間に小字で記した。
 - ③ 本文中の○印は、その位置に句点(○)で示した。
 - ④ 墨で塗りつぶすようにして訂正している箇所は、□で示し、右行間に訂正された文字があれば、小字で示すことにした。訂正前の文字は、読めれば、本文行中に同じ大きさで示したが、殆んどは塗りつぶされている□ということになった。
 - ⑤ 本文の判読困難な文字も□で示した。
 - ⑥ 丁付けは、^(1・オ)のような形で示した。猶、各行も原文の通りの行数、長さになって居り、「は半丁の終わりを示している。

奈良の都の時代なる……

(中将姫の一異話)——翻刻と研究——

橋口晋作

今回ここに紹介するものは川辺中央公民館が所蔵する中将姫の一異話である。

本書の書誌は、美濃紙袋綴、縦二四・五糎、横一六・二糎、全十枚、共表紙、表題無し、各丁片面五〜七行の通りである。

表記は、僅かに漢字の入った仮名文である(影印参照)。仮名は平仮名に特定の変体仮名、片仮名が雑然と交じっている。文中に○印が付けられているが、これは息の継ぎ目でも示したものであろうか。連用修飾語の後だけでなく、連体修飾語の直後にも付けられていて、今日の読点の付け方とは大いに異なる。文字は、稀に続け書きがある、一字一字の分かち書きで、大きさも不揃いであり、稚拙の印象は拭いがたい。変体仮名を中心に、右行間に片仮名でその読みが記されている文字もある。これは、本書が書き上げられた後、読まれ(ることが期待されてい)たことを示すものであろう。

本書は、先に本誌第二十号^(注二)に紹介した雑俳集『弘化四年未初秋 俳諧』と同じ所に置かれていた。町誌を編む時に集められたものではない

かとのことであつたが、収集の経緯は全く分からない。

次に、その原本の表紙裏と冒頭半丁を影印にして示し、その後に、本文を翻刻して紹介し、考察を加えて行くことにしよう。

影 印

